

# 神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相(3)

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

## 1. はじめに

瓦は、寺院建築と共に大陸からもたらされ、国家的政策に基づき畿内を中心に次々と寺院が建立され、併せて瓦も大量生産、大量供給された。瓦は寺院のみならず、宮殿や官衙の一部の屋根をも飾るようになった。

瓦の研究は、製作技法、文様の系統・系譜・変遷、年代など瓦自体に向けられたもの、その研究の深化は瓦が葺かれていた寺院の造営時期・期間、寺院の変遷、寺院の造営主体の問題、さらには瓦の生産元の窯と供給先の寺院との流通関係といった研究課題にも当然のことながら大きな役割を果たしてきた。県下においてもこうした観点での研究が盛んになされ、成果を上げている。

今回、奈良・平安時代研究プロジェクトチームは、県内各地の古代寺院を除く遺構から出土した古代瓦を研究対象として取り上げることにし、2年かけて集成した。瓦の出土は寺院に偏ることは当然だが、寺院から距離を置いた集落の竪穴建物等から出土することもまま見られる。今回はこうした寺院以外の遺構出土の瓦に敢えて焦点を当てることで、これまでの瓦研究とは一味違った瓦観を描き出してみたいと考えた。従来どちらかというと支配・権力側の枠内で語られていたものを、瓦の動きから在地社会が支配機構にどう関わっていたのか、あるいは地域間、地域内の交通・流通関係を解き明かす可能性を秘めた研究になるのではないかと考えた。そこで集落からの出土状況の分布、遺構の種類と構成、出土状況、軒丸・軒平瓦についてなど集成表から読み取ったデータについて若干の分析を試みた。以下に紹介する。

## 2. 古代瓦の分布について

昨年度まで古代プロジェクトでは集落遺跡から出土する瓦の様相として神奈川県内の集落遺跡から出土する瓦について集成を行ってきた。ここでは瓦の分布状況についてまとめ、結果と今後の展望について述べたい。第1図にこれまで集成してきた瓦の出土地点についてプロットしてみた。郡毎では、相模国では愛甲郡、高座郡、足下郡、大住郡、鎌倉郡、御浦郡、武蔵国では都築郡、橘樹郡に見られる。

### 古代寺院・国府等との関係

相模国内には瓦を産する遺跡が各地に点在する。7世紀後半から9世紀にかけては各地に寺院が建てられた。また、数度の移転があったといわれる相模国府、各郡にはそれぞれ郡衙が設けられた。今回集成が行われた遺跡も多くがこれらの寺院および国府等の推定地により近いことが挙げられる。愛甲郡では鐘ヶ嶽廃寺、高座郡では下寺尾廃寺と相模国分寺・尼寺、足下郡では千代廃寺、大住郡では四之宮下郷廃寺、国府推定地、鎌倉郡では鎌倉廃寺、御浦郡では宗元寺などがある。また、武蔵国南部の都築郡では岡上廃堂、橘樹郡では影向寺、寺尾台廃堂、長者原遺跡などがある。

### 古代駅路等との関係

第3図は相模国と武蔵国南部の駅伝路の想定図および瓦の出土地点を重ねた図である。おおそ伝路沿いに出土が認められる。特に箕輪駅から夷参駅にかけては多くの出土が認められる。夷参駅は、『延喜式』には記されておらず、編纂以前に廃駅になったと言われている。今回の集成において駅より北側の推定道沿い

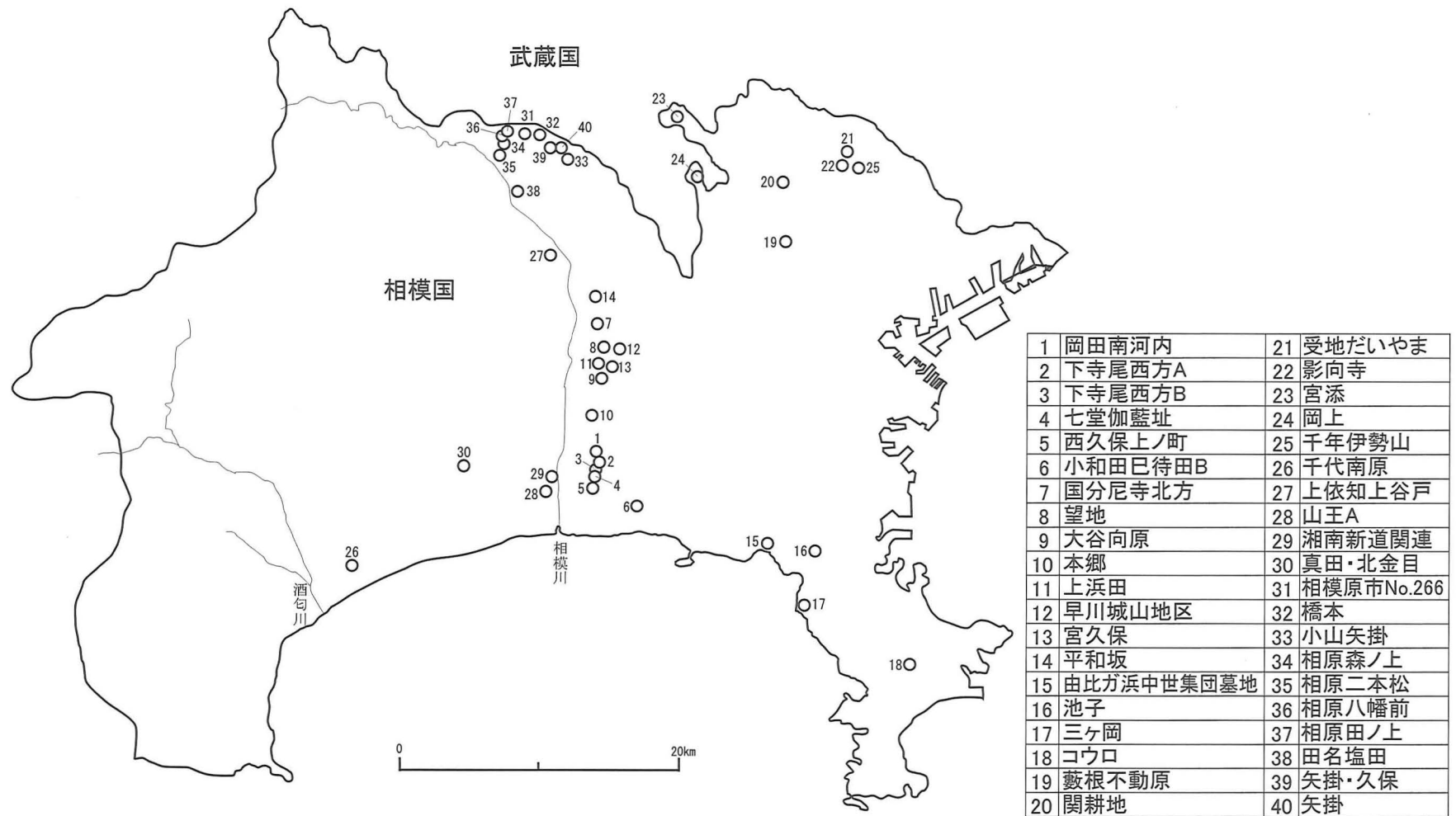


図1 瓦が出土した主な集落遺跡



図2 瓦出土地点および古代寺院と村落寺院、瓦窯の分布

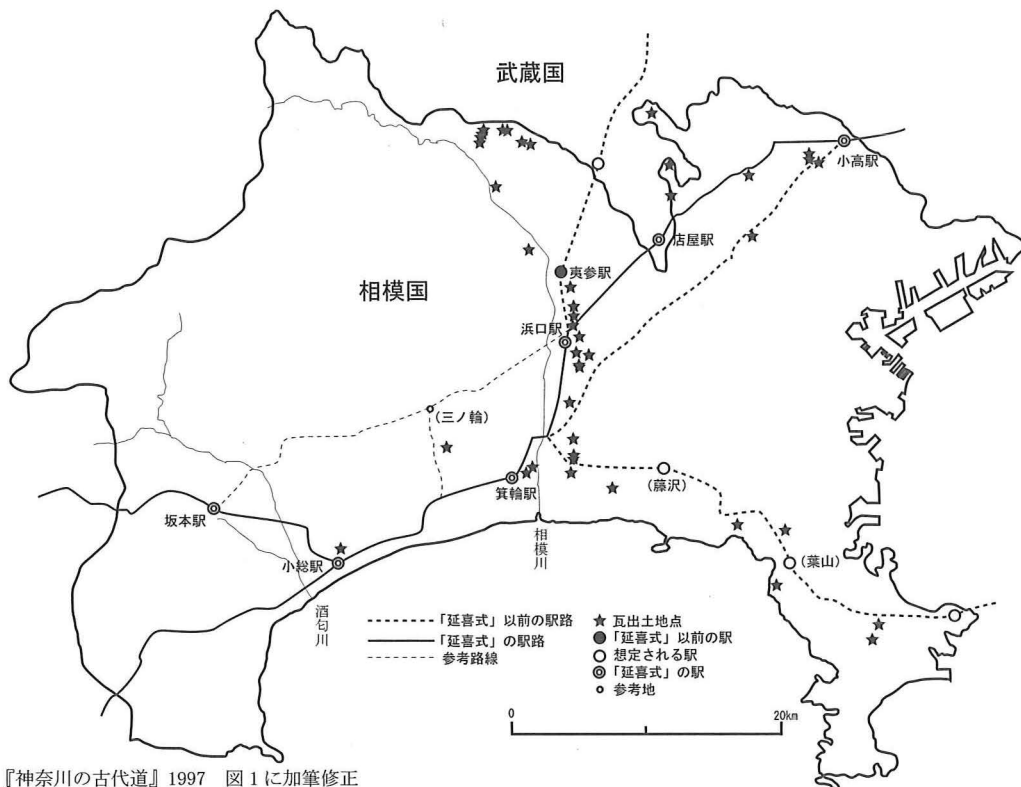


図3 相模国と武蔵国南部の駅伝路想定図

では出土が見られないことも、出土に偏りがあったと言えよう。相模国北部（現在の相模原市域）からの出土状況からは、大きく駅路を逸れたところからも比較的まとまって分布がみられる。また、これまでは想定でしかない駅家の所在地についてもこれらの瓦の分布が手がかりとなる可能性がある。

以上、瓦の分布状況についてまとめてきた。やはり古代の寺院、国府等の周辺に多くの出土がみられるが、相模国北部の状況からは寺院以外の場所でも一定の出土量がみられた。相模国北部では周辺に瓦尾根瓦窯などの南多摩古窯郡の存在が知られ、寺院などの瓦以外に、瓦窯の存在も出土に影響を与えていることが視える。また、駅伝路沿いに出土が偏ることも明らかとなった。中でも箕輪駅から夷参駅間の出土状況は濃密であることから、律令体制下においてこれらの駅間を盛んに人の往来があったことが視られる。

なぜ集落内に瓦が持ち込まれるかは定かでない。出土状況をみる限りでは竈の補強材として使用したように見られるが、あるいは何らかの呪術的な意味合いがあるのかもしれない。まったく推測の域であるが、ありがたい寺院にまつわるものを家の中に持ち込み、竈の一部とすることに意味があったのかもしれない。

いずれにせよ、集落内から出土した瓦を集成することは様々な古代史研究の課題への切り口となることは間違いなくその意義は大きい。今後は瓦以外の出土遺物との比較を通して、より詳細な人的、物質的交流について明らかにしていきたい。

（相良）

### 3. 瓦出土の遺構について

2年にわたり集成した神奈川県内の集落遺跡から出土した瓦は約1650点にのぼる。集成にあたり遺構外・遺物包含層は除外しているが、明確な人為的な掘り込みを伴わない河道や土器集中、土器棄場状遺構、貝塚状遺構からなどという出土例もある。また、遺構内から出土した瓦を伴う遺跡の、遺構外出土の瓦も集成されている。ここでは瓦を出土した遺構に焦点を絞り、取り上げてみたいと思う。

出土した遺構の種類は竪穴住居址、掘立柱建物址の柱穴、井戸、溝状遺構、土坑、ピット、道状遺構、配石遺構や集石、土壇墓、不明遺構など多岐にわたる。通常の集落遺跡で報告されるほとんどの遺構から出土していると言ってよい。これらの遺構内から出土した瓦の数は約1250点である。

集落遺跡で最も多く検出される遺構は竪穴住居址である。遺構内出土の瓦に限定しても竪穴住居址から出土する例が最も多い。遺構数は273軒、出土した瓦の数は708点と、遺構内出土瓦の2分の1以上を占めている。出土状況としては覆土中からの出土が点数としては最も多い。しかし川崎市内や海老名市内、平塚市内の遺跡では、竈の構築材として使用されていた出土例が複数確認されている。また、1軒の竪穴住居址から出土する瓦の数は、平均1～4点である場合が多い。稀に8～10数点、あるいは30点とまとまって出土する竪穴住居址が集落内に混在する。集落内に存在する住居址の多様性について課題を示唆するものであろうか。

竪穴住居址に次いで出土数が多い遺構は、218点を出土した溝状遺構である。溝状遺構の数は83条である。ひとくくりに溝状遺構といってもその性格は多様であろうが、瓦の出土状況は覆土中に混入した状況が大半である。

そのほか主だった遺構をみると、掘立柱建物址は遺構数31棟から98点出土している。井戸は27基から56点、土坑は18基から35点、ピットは23基から35点出土している。ピットの中には根固めに使用されていた今小路西遺跡のような例もあるが、ほとんどは覆土中からの出土である。このほか、意外に出土点数が多い遺構としては、道状遺構8条からの出土瓦は38点をあげることができる。

集落遺跡から出土した瓦の平瓦と丸瓦の割合は、おおそ2:1である。遺構内の瓦が、完形あるいはほぼ完形で出土することは極めてまれである。竈の構築材を除くと元の大きさを復元することができない小破片として出土するが多い。軒丸瓦・軒平瓦は30点出土しているが、特筆すべき出土傾向は見いだせない。

以上、出土遺構について概観したが、遺跡の分布状況とあわせて考えてみると瓦を需要していた遺跡の近辺で、集落内に持ち込まれた可能性が高いことが再確認された。瓦を使用していた建物と集落の人々とのかわりが、出土状況として表れているのであろう。しかし出土遺構は多岐にわたるが、そのほとんどは明確な使用状況を示すものではない。小破片が多いのはなぜだろうか。何のために持ち込んだのか、なぜ持ち込んだのかという疑問が、集成表を眺めて更に大きくなった。集落内の瓦はどのように再利用され、遺棄されたのであろうか。更なる資料の増加が待たれる。

(加藤)

#### 4. 集落遺跡における瓦の出土状況の検討

本項では、集落遺跡における瓦の出土状況をまとめ、使用方法の実態に迫りたい。

集落遺跡から出土する瓦は、出土状況や数量からすると、屋根に葺くという本来の目的とは異なる使用方法が取られていた可能性が高い。しかしながらその方法は、集成した瓦出土遺構についての8割以上が覆土や確認面から出土したもの(261遺構46%)、ないしは出土状況の記述がなく(218遺構38%)、不明な点が多い。堅穴住居址の床面から出土している事例も散見される(20遺構)が、やはりその用途は判然としない。出土状況から明確となっている瓦の使用方法是、堅穴建物址における竈の構築材(註1)、および柱穴に用いられる礎板・根固めとしての用途である。

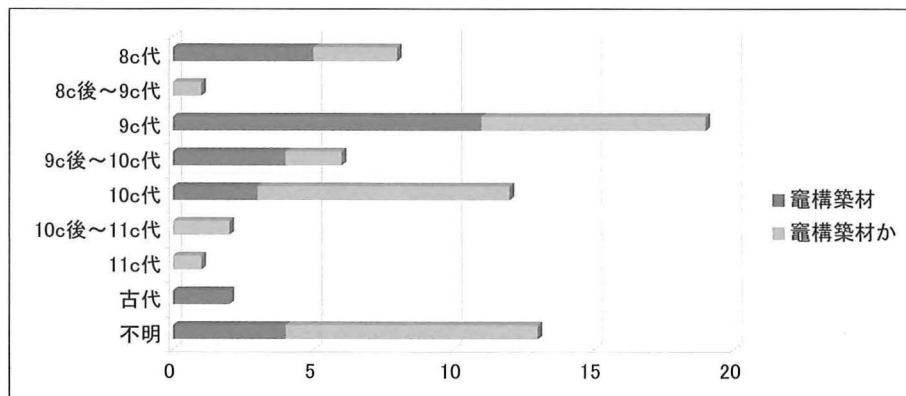
まず、竈構築材としての瓦の出土状況を概観する。今回の集成において、竈袖・竈構築材と報告される遺構は17遺跡32遺構が確認された。また、このほか出土位置に関する記述について竈・竈覆土や竈周辺となっているものが20遺跡34遺構確認されているが、これらの遺構から出土した瓦についても、竈の構築材として使用されていた可能性が考えられる。

これらの遺構について、帰属年代が明瞭なものは26遺構中51遺構であるが、初現は8世紀第2四半期である。瓦の使用は9世紀代をピークに11世紀代の遺構まで見られる(第1表)。8世紀代の遺構は、第2四半期に川崎市影向寺跡および岡上-4遺跡第2地点から検出されている。影向寺跡は7世紀末に遡る創建年代を持ち、8世紀中葉前後以降は郡寺としての公的な性格を持つようになるとされる寺院址である。岡上遺跡は、堂宇等は発見されていないが、表採資料などから古代寺院の存在が古くから知られる遺跡である。8世紀中頃からは、海老名市座間丘陵上に立地する上浜田遺跡にて散見されるようになる。上浜田遺跡から北方約1kmには相模国分寺が所在する。8世紀後半代からは国府城内の遺跡で検出される例が見られる。当該期はこのような寺院もしくは官衙関連の遺跡での事例があるのみである。そして9世紀代以降、このような官衙・寺院関連遺跡のほか、相模原市田名塩田遺跡群や横須賀市コウロ遺跡、平塚市真田北金目遺跡群など、分布が広がっていく。

竈構築材としての瓦は、袖の芯材や煙道・天井部の補強、支脚などに用いられる。使用される瓦は丸瓦・平瓦が主体であるが、構成比は概ね2:3となり、前述の集落遺跡から出土する瓦の組成比よりも、やや丸瓦が優勢である。今回の集成では反映されていないが、平成21年度刊行予定である小出川河川改修事業関連遺跡群では、完形の丸瓦が竈の両袖前面に貼り付いた状態で検出された事例が報告されている(註2)。このような事例からは、瓦種別に対する選択意図があったことも考えられるが、竈から出土する瓦の大半が破

第1表 竈構築材瓦出土遺構一覧と時期別推移

遺跡所在地	遺跡名	遺跡の性格	出土遺構		出土瓦			出土位置	遺構年代
			No.	種別	丸瓦	平瓦	その他		
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H22	竈穴住居址	1	5	0	覆土・竈覆土	8c 第2
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H12	竈穴住居址	5	11	0	竈材	8c 第2
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H17	竈穴住居址	8	27	5	床面・竈材	8c 第2
川崎市	影向寺遺跡	寺院関連	8	竈穴住居址	1	1	0	竈材	8c 第2
海老名市	上浜田遺跡	集落	3	竈穴住居址	0	1	0	竈材	8c 中
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H4	竈穴住居址	1	3	0	竈覆土	8c 後
海老名市	上浜田遺跡	集落	39	竈穴住居址	1	0	0	覆材	8c 後
平塚市	天神前遺跡第8地点	国府城	10	竈穴住居址	1	1	0	竈・覆土	8c 後
海老名市	国文尼寺北方遺跡	寺院関連	4	竈穴住居址	3	6	0	竈	8c 後～9c
海老名市	上浜田遺跡	集落	76	竈穴住居址	0	1	0	竈	9c
海老名市	国文尼寺北方遺跡	寺院関連	1	竈穴住居址	0	2	0	竈材	9c
海老名市	国文尼寺（北方）遺跡1次調査	寺院関連	6	竈穴住居址	0	2	0	竈材	9c
相模原市	田名塩田遺跡群A地区	集落	H8	竈穴住居址	5	1	0	竈覆土	9c 前
茅ヶ崎市	七堂伽藍址第2次確認調査2トレンチ	寺院関連・集落		竈穴住居址	0	1	0	竈袖	9c 前
海老名市	上浜田遺跡	集落	14	竈穴住居址	0	1	0	竈材	9c 前
海老名市	上浜田遺跡	集落	77	竈穴住居址	0	1	0	竈材	9c 前
川崎市	野川東耕地遺跡第2地点	集落	22a	竈穴住居址	3	1	0	竈覆土	9c 第2
川崎市	影向寺遺跡	寺院関連	10	竈穴住居址	1	2	0	竈	9c 第3
平塚市	四之宮下郷3区	国府城	7	竈穴住居址	0	3	0	竈覆土	9c 中
平塚市	大会原遺跡第4地点	国府城	NH70	竈穴住居址	0	0	2	竈袖補強材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	16	竈穴住居址	1	11	0	竈材・掘り方	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	19	竈穴住居址	0	9	0	竈材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	28	竈穴住居址	1	3	0	竈材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	36	竈穴住居址	0	3	0	竈材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	38	竈穴住居址	1	1	0	床面・竈	9c 中～後
横須賀市	コウロ遺跡	集落	4d	竈穴住居址	1	0	0	竈	9c 中～後
平塚市	天神前遺跡第7地点	国府城	2	竈穴住居址	1	1	0	竈（袖構築材）	9c 後
海老名市	上浜田遺跡	集落	17	竈穴住居址	0	2	0	竈材	9c 後
平塚市	平塚城跡遺跡	集落	2	竈穴住居址	0	1	0	竈	9c 後
平塚市	真田・北金目遺跡群12区	集落	57	竈穴住居址	1	0	0	竈	9c 後～10c 前
海老名市	国文尼寺北方遺跡	寺院関連	1	竈穴住居址	0	4	0	竈材	9c 後～10c 前
海老名市	上浜田遺跡	集落	5	竈穴住居址	3	4	0	床面・竈材・覆土	9c 末～10c
綾瀬市	宮久保遺跡	集落	123	竈穴住居址	0	3	0	竈材	9c 末～10c 初
海老名市	上浜田遺跡	集落	6	竈穴住居址	6	9	0	竈	9c 末～10c 前
綾瀬市	早川No.100遺跡	集落	H1	竈穴住居址	2	0	0	竈材	9c 末～10c 前
平塚市	天神前遺跡第7地点	国府城	36	竈穴住居址	2	3	0	竈・覆土	～10c
小田原市	千代南原第VI地点	遺物包蔵地	1	竈穴住居址	1	1	0	竈周辺	10c
平塚市	東中原B遺跡	集落	11	竈穴住居址	0	1	0	竈覆土	10c
平塚市	稲荷前B遺跡第5地点	国府城	8	竈穴住居址	0	0	1	竈	10c 前
平塚市	稲荷前B遺跡第5地点	国府城	19	竈穴住居址	0	0	1	竈	10c 前
川崎市	黒川地区遺跡群VII宮添遺跡	集落	5a	竈穴住居址	1	1	0	竈覆土	10c 前
相模原市	矢掛久保遺跡	集落	8	竈穴住居址	2	3	0	竈材	10c 初～中
相模原市	橋本遺跡	集落	82	竈穴住居址	4	0	0	竈材	10c 第2～3
平塚市	天神前遺跡第8地点	国府城	14	竈穴住居址	1	1	0	竈・覆土	10c 中
厚木市	上依知上谷戸遺跡	集落	H2	竈穴住居址	0	2	0	竈覆土	10c 中
相模原市	矢掛久保遺跡	集落	34	竈穴住居址	1	1	0	竈材・確認面	10c 中～後
相模原市	橋本遺跡	集落	72	竈穴住居址	11	6	0	竈覆土	10c 第3～4
相模原市	相原田ノ上遺跡	集落	6	竈穴住居址	5	2	0	竈覆土	10c～11c 前
平塚市	真田・北金目遺跡群12区	集落	65	竈穴住居址	1	0	0	竈	10c 末～11c 後
平塚市	六ノ城遺跡第4地点	国府城	90	竈穴住居址	1	0	1	竈袖補強材	11c 前
平塚市	真田・北金目遺跡群12区	集落	56	竈穴住居址	1	0	0	竈	11c 後





片資料であり、選択意図の有無は、それが可能な状況にあったか否かを含む問題として捉えなければならない。

礎板・根固めとしての瓦は、今小路西遺跡のピット4基から検出されている。遺跡は鎌倉郡衙に比定され、郡庁域の建物群が検出されている。これらのピットもまた郡衙関連遺構の可能性を持つことから、集落遺跡とは異なる性格であると判断したため、今回の検討対象からは除外する。

以上、集落遺跡における瓦の出土状況についての概観を述べてきたが、各事例個別の出土状況について詳細な検討に至ることができず、使用実態としては竈の構築材としての用途しか明らかにすることはできなかった。それではなぜ瓦が構築材として使用されたのだろうか。利点としては、弧状を呈す形態から竈表面に貼付しやすいことや、ある程度の規格があることから扱いやすい等が考えられるが、同一遺跡内における同時期の竈でも瓦を使うものと使わないものがある。この差異が生じる要因については、機能的利点だけでなく、集落に持ち込む瓦の意義を見据えて考えていかなければならないだろう。（齊藤）

（註1）神奈川県内における瓦を使用したについて、服部みはる氏は相模国の事例を集成しており、傾向及び特徴について、地域・時期・使用状況・種類・産地・共伴遺物から考察を行っている（服部みはる2005「瓦を使ったカマド～相模の事例～」『論叢古代相模 一相模の古代を考える会十周年記念論集一』相模の古代を考える会）。

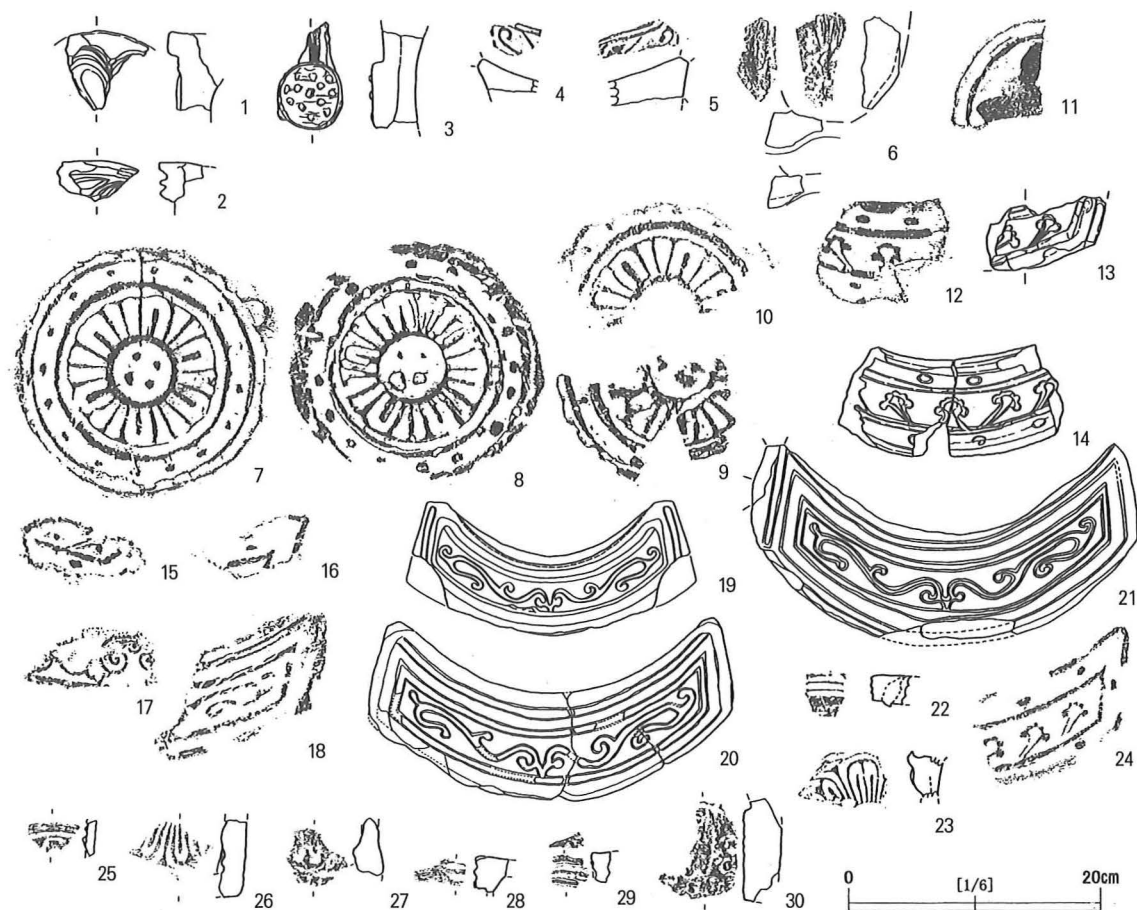
（註2）小川岳人2004「小出川河川改修関連遺跡群」『第15回茅ヶ崎市遺跡調査発表会 発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

## 5. 文様瓦の様相

ここでは、研究紀要13・14号の2ヶ年で集成した古代瓦のうち、文様瓦の様相について概観する。集落遺跡から出土した文様瓦（軒丸瓦・軒平瓦）は全部で38例が確認されているが、このうち文様が判明するなどの主要な30例を第4図・第2表に掲げた。

まず、軒瓦が出土した遺跡と数量の内訳を見ていくと、川崎市で1箇所5例（岡上ー4遺跡）、海老名市で2箇所3例（国分尼寺北方遺跡、国分尼寺関連遺跡）、平塚市の相模国府域およびその周辺で8箇所21例（大会原・坪ノ内・六ノ域・高林寺・天神前・諏訪前A・山王B・稲荷前B・道半地遺跡）、小田原市で2箇所9例（千代仲ノ町遺跡第5地点、千代南原遺跡第XV地点）が挙げられる。それぞれの遺跡は、川崎市は岡上廃寺、海老名市は相模国分尼寺、小田原市は千代廃寺など、いずれも古代寺院に極近接した地理的環境下であり、平塚市の場合も寺院の所在は必ずしも明確では無いが、相模国府付属の寺院（四之宮廃寺・高林寺寺院跡等）に関連するものと考えられる。その分布は必ずしも局所的なあり方では無いが、国府域の東方に偏る傾向は認められる。なお、平塚市に事例が多い背景としては、流通した瓦の数量というよりは、むしろ発掘調査件数の多寡が反映しているためであろう。

次に、文様構成を見ると、まず岡上ー4遺跡では単弁八葉蓮華文・剣菱状八葉蓮華文の軒丸瓦3点と、唐草文系の軒平瓦2点が確認される。いずれも8世紀第2四半期後半の住居（H-17号住居址）から出土したもので、両者はほぼ同時期の組み合わせと見て良い。剣菱状八葉蓮華文の文様瓦は、武蔵国府・国分寺や日野市落川・一の宮遺跡、調布市染地遺跡、川崎市菅寺尾廃寺などでも事例があり、さらにその生産窯は稲城市の大丸瓦窯に求められ、多摩川流域各所の遺跡に分布する文様である（福田1988）。相模国分尼寺では、報告書には写真が掲載されているのみだが、尼寺関連遺跡の第1次調査で単弁八葉蓮華文の軒丸瓦として2点が報告されている（林原1989）。写真図版を見る限りでは、いずれも瓦当面外周に珠文が巡り、破片資料



第4図 集落遺跡出土の文様瓦

第2表 集落遺跡出土の文様瓦

No.	市町村	遺跡名	遺構名	遺構の時期	種類	文様・調整等	備考
1	川崎	岡上-4遺跡 第1地点	H-17号住居址	8c-第II後	軒丸瓦	単弁八葉蓮華文	
2					軒丸瓦	単弁八葉蓮華文の中房か	
3					軒丸瓦	剣菱状八葉蓮華文	京所・中和田資料に近似。
4					軒平瓦	唐草文系・図文詳細不明	
5					軒平瓦	唐草文系・図文詳細不明	
6	海老名	国分尼寺北方遺跡	道状遺構	中～近世	軒丸瓦	図文不明	瓦尾根瓦窯系。
7	平塚	大会原遺跡 第4地点	NH70号住居	9c中	軒丸瓦	単弁六弁蓮華文	竈袖補強材。国分尼寺・七堂伽藍跡と同範。
8					軒丸瓦	単弁六弁蓮華文	
9					軒丸瓦	単弁六弁蓮華文	
14		坪ノ内遺跡 第7地点	C1溝	中世	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	(湘南新道関連遺跡)
13			遺構外	—	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	
21		六ノ城遺跡 第4地点	S190	11c前	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	竈袖補強材。
11		六ノ城遺跡 第14地点	NH261号土坑	—	軒丸瓦	素弁蓮華文	(湘南新道関連遺跡)
12			遺構外	—	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	
10		高林寺遺跡 第5地点	遺構外	—	軒丸瓦	単弁六弁蓮華文	
16				—	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	
18		高林寺遺跡 第7地点	SI11	10c中	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	
20		天神前遺跡 第7地点	2号住居	9c後	軒平瓦	均整唐草文	竈袖補強材。
15	小田原	諏訪前A遺跡 第1地点	SD03	7-11c前	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	(四之宮下郷1区)
17		山王B遺跡	—	—	軒平瓦	均整唐草文、縄叩き	国分僧寺と同範。
19		稲荷前B遺跡 第5地点	8号住居	10c前	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	竈袖補強材。
—			19号住居	10c前	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	竈補強材。
22		千代仲ノ町遺跡 第5地点	2号溝	10c後-11c初	軒丸瓦	外区:三重圏線・隆線鋸歯文	
23					軒丸瓦	内区:複弁蓮華文	
24		千代南原遺跡 第XV地点	第1号建物址 遺構外	10c前-中	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	宗元寺と同範・後出。
25				—	軒丸瓦	蓮弁	
26				—	軒丸瓦	蓮弁・圏線	
27				—	軒丸瓦	蓮弁・圏線	
29				—	軒丸瓦	蓮子10以上、中房片	
28				—	軒丸瓦	三重圏線	
30				—	軒丸瓦	三重圏線	



のため弁数が八葉か否かは確認出来ないが、尼寺出土の軒丸瓦は珠文縁を伴う八葉の文様瓦が主体のため（河野1998他）、本資料も同種の瓦と思われる。平塚の相模国府関連遺跡では、軒丸瓦は単弁六葉蓮華文が4個と素弁蓮華文が1個、軒平瓦は飛雲文が5個と均整唐草文が6個が出土している。軒丸・軒平瓦ともに住居カマドの補強材として転用されている事例が目立つことは興味深い、なかでも大会原遺跡第4地点のNH70号住居出土の単弁六葉蓮華文軒丸瓦は、海老名国分尼寺・下寺尾廃寺出土例と同範で、範傷からその先後関係が確認されている（高橋2009）。軒平瓦の調整の調整は飛雲文が縄叩き、均整唐草文が格子叩きを伴い、前者は宗元寺・千代廃寺（同図24）、後者は国分僧寺・尼寺にも同系の瓦がある。特に国分尼寺では単弁六葉蓮華文と均整唐草文の組み合わせが、9世紀後半代の再建期瓦に位置付けられており（國平2002）、国府域においても9世紀後半から10世紀代の堅穴住居より出土している事が確認される。最後に小田原の事例は、三重圏縁と鋸歯文・複弁蓮華文を施す軒丸瓦と飛雲文軒平瓦が出土している。軒丸瓦はいずれも細片で図文の詳細は不明だが、千代寺院へ製品を供給した松田町からさわ瓦窯に三重圏縁複弁十葉蓮華文の軒丸瓦があり、恐らくは当該窯産の文様瓦と思われる。（依田）

#### 引用・参考文献

- 河野一也 1998 「相模国分寺」『聖武天皇と国分寺—在地から見た関東国分寺の造営—』雄山閣
- 國平健三 2002 「相模国分寺と地方寺院の研究」『総合研究—さがみの国と都の文化交流—』神奈川県立歴史博物館
- 高橋 香 2009 「瓦の様相—湘南新道出土瓦の一樣相について—」『湘南新道関連遺跡 II』かながわ考古学財団調査報告 242 財団法人かながわ考古学財団
- 福田健司 1988 「日野市落川遺跡出土の磁器—その出土背景—」『貿易陶磁研究』No.8（のち、同著2008『南武蔵の考古学』福田健司さんの定年を祝う会刊行、に再録）
- 林原利明 1989 『相模国分尼寺関連遺跡 第1次調査発掘調査概報』相模考古学研究所

## 6. まとめ

瓦は本来、「古代寺院や都城、国府・郡衙等公的施設の建物の屋根を飾るもの」として用いられるものである。集落内で出土している瓦は本来の使用法とは異なり、堅穴住居址のカマド等に用いる等本来の使用とはかけ離れた使用法である事が窺える。では、どういった集落から出土しているのだろうか。

瓦が出土する集落の分布について、駅伝路沿いである事が指摘されている。確かに、出土地点をおとすと駅路沿いにみられる事、また、古代寺院や瓦窯に近接した集落からの出土が多い事が窺える。神奈川県北部に集中している点は、県境に瓦尾根瓦窯を中心とした瓦窯址群が北側に展開しており、瓦屋に所属する瓦工人の集落の可能性が想定されるだろう。また、国分寺や国府、郡衙などに近接した集落域からの出土事例が多い、というのも各施設の造営に携わった工人等の集落址と捉えられようか。基本的に、瓦の使用が可能＝その建造物の造営等に関与した工人等の集落として認識してよいだろう。もちろん、瓦が出土している集落すべてにいえる事ではなく、他の要素も考慮しなければならない事はいうまでもない。

使用方法については様々なパターンがみられたが、最も多いのが堅穴住居址のカマドの構築材としての使用方法である。カマドに使用する以外では、細かく破碎した後、それを転用砥石として使用するものがあり、これは須恵器片の使用事例と同様である。また、細かく破碎したものの中には土地改良の部材として使用しているものもあり、版築などの混和材などに用いたようである。カマドの芯材に瓦を使用する傾向は、作りつけカマドをもつ堅穴住居址がみられる地域で、なお且つ国府・国分寺など瓦を使用した建物址のある遺跡

に近接した集落遺跡からは普遍的に見られるようで、西は伊勢まで確認され、関東地方で多く出土事例が挙げられている。

瓦を使用していた空間が隣接ないしは近接していた場合、入手しやすい部材という事もあり、自在に扱っていたようであるが、古代人の瓦一枚に対する扱い方が様々であるのは興味深い。例えば、「知識衆」が寄進行為の1つとして平丸瓦に氏名等を記載したり、労役の実態を表すものとして扱われる一方で、「カマドに使用する」、という日常生活の一部としての使用方法がみられる。信仰の対象として用いた場合もあれば、特に意識しない人々にとっては使えるものはなんでも使う、というリサイクルの精神が古代人にもあったのだろうか。

今回の集成では、個々の瓦についての産地同定まで踏み込む事はできなかった。県内の瓦の産地については、近年の調査で横須賀市・乗越瓦窯の存在が明らかとなり、不明瞭であった相模国内の瓦の供給体制が明らかになりつつある。神奈川県内では、簡単にわけると、

- ・三浦半島を中心とした瓦窯体制
- ・からさわ瓦窯を中心とした瓦窯体制
- ・瓦尾根・南多摩を中心とした瓦窯体制

の三体制が想定される。瓦は、本来の所属先、つまり国府や国分寺、古代寺院等へ供給されており、集落へ直接供給されているわけではないが、各々の産地同定を行う事により、県内での流通経路が明らかになるだろう。

「古代寺院以外の瓦集成」という通常の瓦研究の視点とは異なった手法ではあったが、県内の瓦出土事例として、集落址からも比較的多く出土している、という事が明らかとなった。遺構が明確なものの、という限定をしている為、「遺構外」として出土している瓦の実態が反映されてはいないが、おおよその県内の出土事例が把握できるかと思われる。分布図の中では大磯・小田原地域が希薄のようにみられるが、遺構外出土事例が多かった、という事になるのだろうか。集成の結果、集落から出土している瓦の多くは、瓦本来の機能を失った、信仰とかけ離れたリサイクル品であった可能性を一つの考え方としてあげたいと思う。(高橋)